東京日々新聞

七百五十四號

西京四条高倉辺に住る老媼なり。身に襤褸を纏ひて指面に賣品の炭團を以て故とりて炭團婆々と称唱へて。自ら一荷の炭團を擔ひ。日々洛中を呼歩行その郷音と形像の嘆辞おもしやと失笑を。祇園の歌妓が橋交際へ阿嬢い何が可笑しや。吾が斯く真黒に成て呼あるく。阿嬢が真白ふ粧たそく歌や舞も俱に皆。同じ渡世業ぞやし。阿嬢い吾を笑へども吾い又其方衆が鄙こそ渡世と笑ふあるこ。吾も二人の女子ありて容顔も此婆々に似たり。年紀も又阿嬢等に似たるか。鄙賤こそ業を為たくあるこ堅

の商家へ奉公させ晝夜稼ぐ炭團の錢僅か美餘

賤い心を起せぬ爲あり斯ふ

の該中を衣服

言やらく阿嬢等が無禮ある

の些料を送のも

と咎むるあらん。餘りに道理を〈

〈取違へ恥を知らぬ痛しさ。

鄙き心と正く良家の細君も

轉々堂主人編

萬家貴義

彫長　尼田　摺昊足屋